

あの黒とも灰色ともつかぬ小寒い色の囚人馬車は、全く遺憾なく囚人馬車らしい。馬さへこの馬車を曳くにふさはしい汚さで、鞭の下から駈けてゐる。殊更に囚人馬車を曳かせられる疲れた馬である。——汗にまみれて坂道に足掻き苦しむ挽馬でさへ、夕べは、荒らかなれども馬方の愛馬である——振返られやうではないか。

鞭を振ふ馭者を見よ。馭者台の板張の冷たさに、古外套に身をすぼめて、膝のあたりを包んだ毛布には、見るからに、長い月日の、幾多の惨めな物語を滲みこめてゐるらしい。隣りに腰かけた護衛の巡查の、貧相な髭の口もとは、いつも吸ひさしのバットに火が点じられさうではないか。かゝる馬車の、寒い風ばかり吹入りさうな錠戸の中に、埃りつぽく踞る囚人は、理智を飛越してたゞいとほしまれる。たとへ、身も世もあらず悲しみに沈んでゐるやうとも、小さい悪魔のやうに人を呪つて慄へてゐるやうとも。

囚人馬車の轍の音の高らかさ。冬の曇り日の夕空の下、ことさらにそれは高らかに軋る。或る時は暴れ者のやうな一徹さに、或る時はまた、物の怪のやうに悄然と。英国あたりの炉辺の物語には、未だに生きてゐるとかいふ、大つごもりの正午の刻を打出す時鐘の響きとともに、何処ともなく死者の魂を受取りに彷徨ひ出るといふ幽霊馬車の不気味さ。そんなものさへ或る時は思ひ出させるではないか、あの囚人馬車の軋り去る後ろ姿は。

古きもの、何故に心乱る、までに怪しくも懐かしまれるのであらう。知る人ぞ知る「文明開化」の語の音律の忽ちに、奇し

きまで明治頃年の一時代色を醸出す含蓄を。「文明開化」「市ヶ谷監獄署」「鉄道馬車」「吾妻コート」「山高ジャッポ」等々。されば、何時も何とはなしに振返させられるのは、轆轤と軋り去る囚人馬車である。

大道の砂埃り、醜怪な広告、電車の混雑、鶴のやうな建築物、それ等はそのままにしてあの囚人馬車も、よきもの、去りゆくまゝに、早くも東京の市街から姿を隠してしまつたらしい。

それにはあらず、快いのはあの玩具の色の赤い郵便馬車だ。高々と仰がる、積荷のてっぺんから、鞭を振ふ仕丁の姿の軽快さ。白地に赤の郵便旗を風に靡かし、りんりんと鈴音高く駛り来る赤い馬車の新らしさ。夜は馭者台の傍近くカンテラの灯さへともされる。自分には、あの赤い郵便馬車を見るたびに、見も知らぬ巴里あたりの古い大道のさまが、何とはなしに快く想像される。

郵便馬車は何時見ても快い。しかも、新緑の頃、すが／＼しく晴れ渡つた真昼、ふりそ、ぐ日の光を真上に浴びて、大道の十字街を横ぎる時、重々しい石の橋梁に轆轤とさしかゝる時、赤い郵便馬車は新らしいまでに美しく光りかゞやく。仕丁、鞭を休めて口笛を吹かないか。

何時見ても、快いのは、あの玩具の色の赤い郵便馬車だ。

(大正11年・曲水7-7)

×

×